

人間！同じ血なのに

ある日の午後、村の有線放送が、突然けたたましく放送を始めました。

「緊急の連絡をします。村の病院でお産をした人が出血多量で危篤状態にあります。血液銀行にも手配しましたが、間に合いそうもありませんので、O型の人は輸血にご協力いただけませんか。今すぐご協力をお願いします。緊急の連絡をします……」



この放送は、のんびり、オートバイをみがいていた二人の青年の耳にも届きました。この青年たちは、自分たちが同じ血液、O型であることに気がつきました。とたんに彼らは、作業服のままオートバイにまたがってエンジンをかけました。彼らは、もくもくと農作業に精を出す、まじめな青年でした。若者の正義感と人を助けるのだという緊張から軽い興奮をおぼえながら、オートバイを走らせました。

彼らが病院に着いたのは、有線放送があってから、ものの20分もたっていませんでした。病院には、まだ一人の供給者もかけつけていなかったようでした。病院では喜んで、

「こんなに早くかけつけてもらって、ありがとうございます。一応、念のために血液型を調べますので……」

医師は、日焼けしたたくましい青年たちの腕から少量の血液を採取しながら、感謝の言葉をのべました。

検査の結果は合格でした。なりゆきを心配していた患者の家族たちは、ほっと安心して青年たちに礼を言いました。

「ところで、あなたがたは、どこから来て下さいましたか。一段落したら、お礼にまいりますので……」

青年たちは、自分の住所を答えました。青年の答えを聞いたとたん、患者の家族たちは顔を見合わせ、あわてた様子で検査室から出ていってしまいました。しばらくしてから、院長室へ呼ばれた彼らに、医師は、

「患者さんの親類にO型の人が出て、すぐ来てくれるということと、病院にも、まだ余分の血液があることを思い出したので……」

と言うのです。病院へかけつけた時とは全く違う、何かとってつけたような感じの医師の言葉に、彼らはわけもわからない思いをいだきながら、オートバイに乗って部落に帰りました。

青年たちが、車を車庫に入れようとした時、また有線放送が、
「再び緊急をお願いします。・・・O型の方は、今すぐ病院へ来て下さい。
お願いします・・・O型の方は今すぐ・・・。」

と鳴り出しました。

二人は、

「さっきは間に合ったようなことを言っていたのに、どうしたんだろう。

変だな。また血液が足りなくなったんだろうか？・・・」

と、しばらく顔を見合わせていましたが、

「行ってみるか。」

と再びオートバイを出して病院へ向かいました。病院の玄関に入るなり、彼らの姿を見つけてとんで出てきた役場の係の方は、

「ああ、今の今、たった今、間に合ったところです。どうも、どうも・・・。」

と言って、ペコペコおじぎをしながら、二人を病院の外へ連れ出してしまいました。

青年の一人は、

「なにっ。せっかく二度も来たのに・・・。」

と一瞬、カッとなりましたが、

「まあまあ、間に合ったと言うんだから。」

ともう一人の青年のなだめで、何となく割り切れない、モヤモヤした気持ちを話しながら帰っていきました。

その言葉が、たまたま庭先で仕事をしていた70歳になる老人の耳に入りました。老人は、二人の青年の話を知り、真っ青になってどなりつけました。

「お前らは、お前らは、こ、こんな明白な差別がわからんのか。村のやつらから差別されているのがわからんのか。それでも青年か、・・・。」

くやしい・・・。だれがこんな差別をつくったんだ。」と



(部落問題研究所編「やさしい部落問題」より)